

たまのよこやま

他館との連携事業報告

平成29年度企画展示
益々好評開催中

他館との連携事業の報告

2017夏

2017年度夏季に実施した小中学生を対象とした事業の中から、北区飛鳥山博物館、町田市、(公財)多摩市文化振興財団、多摩動物公園との連携事業をご紹介します。

夏休みが本番を迎えた8月4日、北区飛鳥山博物館では、「夏休み縄文人なりきり体験教室」が開催されました。この教室は、縄文服の試着やクルミ割り、火おこしや弓矢などの体験をとおして、縄文人の暮らしについて理解を深めることを目的に企画されました。この教室は午前と午後と各1回の開催ですが、毎年とても人気があるそうです。

当日は、まず北区飛鳥山博物館の学芸員による縄文時代の衣食住に関するミニ講義があり、その後、館内の展示室を見学しました。縄文人がどんな暮らしをしていたのか、そんなことを想像しながら、ここからが体験の始まりです。参加者は3つのグループに分かれ、縄文服の試着、クルミ割り、火おこしや弓矢、縄文土器の模様を付ける体験などを順番に体験してまわります。

縄文服を着れば、気分は縄文人!? 縄文人になったつもりで、弓矢に挑戦です。的はセンター特製の段ボールで作ったイノシシとウサギです。弓の弦をいっぱい引いて、矢を放ちます。イノシシに当たるかと思いきや、矢は的とは違う方向に行ってしまいました。イノシシやウサギにうまく命中させることができた参加者はどれくらいいたのでしょうか。

今度は、クルミ割り体験です。クルミは、当センターの遺跡庭園で採集したオニグルミを使いました。石皿の上に置いたオニグルミに勢いよくたたく石を



狙いはあのイノシシ!

振り下ろします。うまく当たればオニグルミは真っ二つに割れますが、当たる場所が少しでもずれるとオニグルミはあらゆる方向に行ってしまいます。オニグルミの殻はとても硬いため、うまく割るには力加減ちからかけんやたたく位置など、ちょっとした

コツが必要です。その他にも火おこしや縄文土器の模様を粘土に付ける体験などを体験し、半日の教室



オニグルミを割るのは一苦勞

はあっという間に時間が過ぎていきました。

8月5日には、町田市の青少年施設ひなた村との連携事業「縄文のアクセサリーまがたま勾玉作り」を実施しました。ひなた村との連携は、春に行った「縄文の布作り」に続き、2度目です。勾玉作りまがたまに使うのは、

滑石かっせきという軟らかい石材です。石材に勾玉の形を書き込んだら、その形になるように紙やすりなどで余分なところをどんどん削っていきます。次に、全体が曲面になるように、角があるところを丸く削ります。平らな部分をいかに少なくし、全体を丸くする

か。ここが勾玉作りで一番大切なポイントです。角を丸くするこの工程はやや難しかった



ようで、参加した小中学生は少し苦戦していたようです。

全体が丸くなったら、今度は削った際にできた傷を消していきます。傷を消す工程をきちんとすれば、ツルツルの勾玉に仕上がります。最後は水に濡らしながら、紙やすりで磨いていきます。十分磨けば、自分だけの勾玉の完成です。

「山の日」である8月11日には、(公財)多摩市文化振興財団との連携事業「縄文時代の生活を体験しよう!」の編布作りあんぎんを開催しました。この日は「縄

文時代の生活を体験しよう！」シリーズの2回目で、1回目は7月28日に勾玉作りを実施しました。いずれの回も、会場は同財団が管理運営するパルテノン多摩のキッズファクトリーで行いました。

「編布」という言葉はあまり聞くことのない言葉ですが、アサヤカラムシの繊維を素材として作られた布のことです。縄文時代には主にこの編布が用いられていたと考えられています。

当日は、縄文時代の服装や布の素材などの解説を行ったあと、いよいよ編布体験の開始です。編布はたていとよこいとから経糸と緯糸を絡め編むことにより、布を作っていきます。材料として用意したのはたこ糸、生成りの麻紐と色の付いた麻紐で、たこ糸は経糸に、麻紐は緯糸として使います。経糸の両端には「コモツチ」という道具を巻き付けるのですが、この作業が少し難しかったようです。難しい作業は、編布の手順を解説した動画を見て確認をしながら進めていきます。

編み始めてしまえば、あとは同じ手順の繰り返し。



緯糸が短くなったら、継ぎ足しながら編み進めていきます。最初はぎこちなかった手

編み方が分かればあとは繰り返しつきも、何度

度も繰り返すうちに慣れてきて、用意した緯糸がなくなる頃には、コースター程度の大きさの布が出来上がりました。

多摩動物公園との連携事業は今年で4年目を迎え、8月15日に「親子で学ぼう！人間と動物のつながり—縄文人のくらしを探る—」を実施しました。このイベントでは、当センター・多摩動物公園での見学や学習を通じて、縄文人と動物の関わり合いを考古学と動物学の2つの視点から学ぶことを趣旨としています。今年度は、新たな試みとして、食品サンプルを用いて縄文時代の食料について考えるプログラムを組み込みました。

当日のプログラムは当センターから始まります。縄文時代の暮らしについて説明をした後、早速、食品サンプルの登場です。参加者が囲む卓上に並べたのは、山菜やキノコ類、魚類の食品サンプルをはじ

め、木の実類の現生標本、動物の剥製や等身大パネルです。どれも縄文人が食料としていたものばかり。今回は、参加者自身がここからひとつ選び、その食料の入手方法や調理方法などを考えるという方法を取りました。

参加者が選んだ食料について、山菜やキノコ類・魚介類・木の実類・動物のカテ



ゴリーごと 縄文人はどんなものを食べてたんだろうに解説を加え、その中でも「動物」に関連する部分は、展示ホールの見学も交えて解説を行いました。当センターでのプログラムの仕上げとして、縄文人の暮らしについてまとめた映像を上映しました。縄文人と動物とのつながりをぼんやりとイメージしながら、次は多摩動物公園へ出発です。

ここからは、多摩動物公園でのプログラムが始まります。縄文人とゆかりの深いイノシシ・ニホンジカ・ノウサギ・ツキノワグマを「縄文の森の動物たち」と題したガイドツアーで見てまわりますが、ただのガイドツアーではありません。今日のガイドツアーは、同園の動物解説員と当センター職員の双方で解説を行い、動物学だけでなく、考古学の要素を盛り込んだ内容になっているのが特徴です。ガイドツアーを終え室内に戻ると、最後はアオダイショウ

の観察です。縄文土器のモチーフにはマムシが用いられていると言われていますが、「ヘビ」



もまた縄文人とはつながりの深い動物なのです。

このイベントでは、食品サンプルを使った取り組みを新たに行いました。食品サンプルと言えども実際に手に取れる「モノ」があることにより、縄文人の食事について、具体的なイメージとして印象付けることができました。 (小西絵美)

下野毛遺跡（世田谷区No. 86）は東京都世田谷区野毛一丁目に所在します。遺跡は武蔵野台地の南東部、多摩川中流域左岸の国分寺崖線^{がいせん}上に立地し、標高は 33m ほどで、上用賀付近に源流がある谷沢川によって形成された台地上に位置しています。

この下野毛遺跡は今まで 15 回の調査が行われ、今回は 16 次調査になります。これまで旧石器時代の遺物、縄文時代・古墳時代・中近世の遺構及び遺物が発見されていますが、主に縄文時代の集落遺跡です。また野毛大塚古墳^{のげおおつかこふん}に代表される、野毛古墳群が展開する地域です。

現在、縄文時代中期後半の竪穴住居跡が 19 軒発見され、土器や石器、人面把手等が出土しています。また昭和 30 年に行われた本遺跡の調査で、初めて発見され埋め戻されていた、縄文時代の 1 号住居跡も改めて確認されています。

古墳時代では調査区南西側で、平成 2 年に行われた第 6 次調査の際に検出された野毛 2 号墳^{しゅうこう}の周溝

に続くと思われる溝が発見されました。円筒埴輪^{えんとろはにわ}や家形埴輪^{いえがた}の破片が出土したことから周溝と判断され、それらの様相から、2 号墳が帆立貝形古墳^{ほたてがいがた}であることが、今回の調査で明らかになりました。

調査区の北東では、平面形で一辺約 16 m の方形を呈する周溝が発見されました。墳丘は削平されていましたが、これまで 12 基が確認されていた野毛古墳群では初めての形態となる方墳が、新たに野毛 13 号墳として確認されました。

13 号墳の周溝の南西隅からは高環^{たかつき}と鉄鎌が出土しており、高環の製作時期は 5 世紀第 2 四半期と見られ、北側に存在する野毛大塚古墳の築造時期^{ちくそう}と近いことから、両者の関係が注目されます。

今後も 3 月まで調査は継続し、発掘調査終了後は整理作業を行う予定です。これらの作業を通じて、下野毛遺跡の縄文時代の集落や野毛 2 号墳の詳細、野毛大塚古墳と野毛 13 号墳の関係を明らかにしていきたいと思います。（鈴木啓介・藤丸亮介）

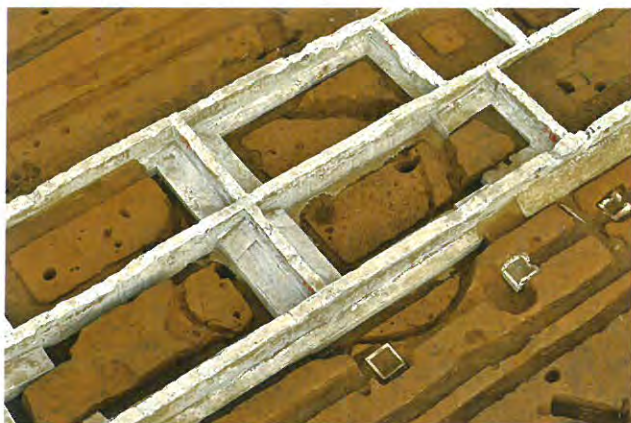


写真 1 縄文時代中期の 1 号竪穴住居跡



写真 2 野毛 13 号墳周溝



写真 3 人面把手



写真 4 高環・鉄鎌出土状態

いま あの遺跡は現在！？ Vol.12

— 国立新美術館・政策研究大学院大学 港区宇和島藩伊達家屋敷遺跡 —

東京都埋蔵文化財センターでは多摩ニュータウン遺跡群をはじめ、都内各地の遺跡の発掘調査を行ってきました。このコーナーでは調査時と現在の写真を比べながら、調査後の遺跡がどのように変わったのかをご紹介します。もしかしたら皆さんが日常利用している施設や道路の下にも遺跡が眠っていたのかも知れません。

港区六本木七丁目。この地域には、東京メトロ千代田線乃木坂駅に直結する国立新美術館と、その南の政策研究大学院大学があります。東には東京ミッドタウン、南には六本木ヒルズの超高層ビルが立ち並び、平成10年代以降、再開発が著しい一帯となりました。ここには以前、東京大学生産技術研究所と物性研究所ぶつせいが置かれており、平成13年から15年にかけて、美術館と大学の建設に先立ち発掘調査が行われました。

この発掘調査では、江戸時代の遺構・遺物が数多く発見されました。江戸時代の古地図では、この場所いよのくにうわしまはんだけは伊予国宇和島藩伊達家の屋敷地となっており、

発掘調査では表御門や御殿きよしつ（藩主の居室）、家臣の生活する長屋に該当する箇所が調査されました。

発見された遺構は、建物の礎石や柱穴列、地下室や上水跡、井戸など多岐にわたります。なかには2万点近くの陶磁器類が出土した大型のごみ捨て穴の他、御殿のあった場所で検出された地下室からは、当時の収納状況に近い形で大皿や大鉢などが、復元率の高い状態で見つかり、当時の藩主の生活が垣間見られます。

寒さが厳しく、外出するのが億劫おっくうになる季節ですが、晴れ間を見つけて美術館見学がてら、周辺の遺跡巡りはどうでしょうか。（武内 啓）



写真1 発掘調査時に撮影された写真（左）と、現在の国立新美術館及び政策大学院大学の様子（右六本木ヒルズ屋内展望台より撮影）。写真中央左は青山霊園。左奥には新宿の高層ビル群が見える。周辺のビル開発の様子がうかがえる。（左写真 東京都教育委員会提供）



写真2 遺跡から出土した遺構と遺物。左は切石造のkamado跡。中央は御殿が立地していた範囲で見つかった地下室。右は同地下室から出土した陶磁器類。（東京都教育委員会提供）

『東京発掘 江戸っ子のくらしと文化』

災いは東から忍び寄る？

—丸の内三丁目遺跡出土の呪符を巡る妄想譚—

今回取り上げるのは、丸の内三丁目遺跡 41 号土坑出土の呪符木簡である。共伴した多量のかわけから推定して、1630 年前後、すなわち寛永前期頃の所産であろう。各々の札には、**金剛界を表す種子（梵字）、中国古代理思想に基づく八卦や五行等、様々な宗教・思想に基づいた表記によって同じ「方位」が重ねて記され、陰陽道等で用いられる真言が添えられている。**これが東西南北各 2 枚ずつ、中央に相当するものが 4 枚の計 12 枚で構成されており、以って四方に結界を結ぶような内容になっている。報告書ではその性格に詳しく言及していないが、筆者は修験僧が関与した厄払いの儀礼の可能性を考えている。

ところが、この札、良く見てみると本来の種子と表現の異なるものが 1 枚だけ含まれているのだ。もちろん、修験独特の描き様の可能性もあるので、一概に間違いとは言いがたい。しかし、もし描き誤りを頓着していなかったのであれば、当時の民間信仰の一面を垣間見るようでもある。但し、これはあくまで現代から見た歴史評価の話。厄を除きたかった当の本人にしてみると、冗談では済まされない問題があったかもしれない。

そこで、この祭祀を行った主に眼を向けることにしよう。報告書によれば、祭祀が行われた頃、その場所を屋敷地としていたのは、丹波・柏原

藩領主、織田刑部大輔信則であった。

信則の家系は、織田信秀の四男（異説あり）、すなわち信長の弟である信包を祖とする。信包は、本能寺の変の後、豊臣秀吉の臣下となった。関ヶ原では西軍として参戦したものの、戦後は徳川家康に領地を安堵された上で、豊臣秀頼を補佐していた。しかし、大坂の役直前の慶長十九年（1614）七月、信包は大坂城内で突然嗜血し、そのまま帰らぬ人となってしまったのである。片桐且元の毒殺説も囁かれたが、その真相が定かになることはなかった。そして、父の遺言により家督を継いだのが、**年齢十六だった三男の信則である。**実は、信則相続の際にも、一悶着があった。既に家康の家臣として伊勢国林城で一万石を領していた長男信重が信則相続の非を訴えたのである。しかし、家康は信包の遺言を重視し、翌元和元年（1615）兄信重の方を改易処分とした。信則が遺跡地に屋敷を拝領したのは、この頃と考えられる。

家督を継いだ信則は、翌年、從五位下を叙任、同九年（1623）、從四位上・刑部大輔に昇任し、同年には嫡男信勝も授かった。寛永三年（1626）には將軍家光の上洛にも供奉し、家運は益々上昇するかに思えた。しかし、その 4 年後の寛永七年（1630）、突如、信則も鬼籍の人となってしまふ。享年 32 歳。父の死からわずか 16 年で、名門織田家は再び大きな災厄に見舞われること



丸の内三丁目遺跡 41 号土坑検出状況



現在の遺跡地（東京国際フォーラム）

となってしまった。

賢明な読者の皆さんなら、もうお気づきであろう。今回取り上げた儀礼が行われたのは、まさにこの信則死去のタイミングなのだ。信則が死に至る災いを除けようとしたのか、あるいは残された家人が謂われなく家中に降りかかる厄を振り払わんとしたのか。いずれにせよ、この儀式が家の命運を懸けた一大事業であったことは想像にかたくない。


ところが、これには後日談がある。わずか八歳で家督を継いだ息子の信勝も、その20年後の慶安三年（1650）、28歳の若さでこの世に別れを告げてしまったのだ。当時、奥方が懐妊していたものの、生まれた児が女であったため、柏原藩は改易、以降は天領となってしまった。「二度あることは、三度ある」とも言うが、あまりに理不尽な結末。叔父の信当が三千石の旗本に

取り立てられたことで、かろうじて家名存続は叶ったとしても、その無念は如何ばかりであったろうか。さて、ここで気になるのが件の札である。もし、あの東の札一枚のせいで結界が正しく結ばれていなかったのだとしたら？もし、正しく描かれてさえいれば、織田家の未来もあるいは・・・。

祈りは心。表象としての遺構・遺物が残ったとしても、その繊細で複雑な機微に触れる事は非常にむずかしい。なにより、考古学は実証の世界。土中からの限られた情報を丹念に拾い集め、これを地道に積み上げることで、漸う一つの歴史像にたどり着くことを旨とする。だが、判ることだけ相手にするのでは時に歯がゆい。一時のあいだ学問を離れ、想像の世界に遊んでみるくらいは許してもらえないだろうか。

（長佐古 真也）


正しいウン


青青
木木木
迷故
三界城
噫々
如律令

表





裏

書き誤った呪符木簡

本来の種子「ウン」は金剛界で東に位置づけられる阿闍如来。「青」「木」も五行説では東を表す。

「迷故三界城」は、お遍路さんの菅笠にも書かれた「迷故十方空 本来無東西 何處有南北（迷うが故に三界は城 悟るが故に十方は空 本来東西なく 何処にか南北あらん）」という言葉に由来するもので、梵字を記した東西南北の札4枚に分けて書かれている。結界を結ぼうとするのであれば矛盾するような内容だが、これらの札には「悟故十方塞」「本来元東西」と書かれており、特に前者は、「悟りを開けば十方を塞げる」とも解釈できることから、これは単なる間違いではなく、意図的に書き換えられた可能性もある。

「噫々如律令」は、「急いで律令のように行え」という意味で、本来は、中国漢代の公文書末尾に添えられた言葉。後に陰陽道などで呪文の結びに用いられるようになった。

東京都埋蔵文化財センターが将来を見越して、その調査事業を都心部へ展開した初期の平成5年。この年は3月まで、自衛隊市ヶ谷駐屯地（現防衛省）での調査で2年間もニュータウンから離れていたため、4月からは懐かしさと安心感に包まれて調査をしていた年だった

と記憶しています。またセンターが久しぶりに新規職員一人を採用し、その職員とパーティーを組んだことでも、忘れられない年になったと思います。でも、実は、自分にとってこの遺跡にはそれ以上にメモリアルな事があるのです。

同年10月1日からNo.327・330遺跡の第二次発掘調査が始まりました。メインとなる時代は古墳時代後～終末期で、51軒もの鬼高式期の住居跡が発見されているのです。正直、それだけでも大変な



写真1 多摩ニュータウンNo.327・330遺跡住居跡分布状況
ことなのですが、個人的にはアンテナがピピッと反応するものではありませんでした（写真1）。

次から次へと平安時代や古墳時代の住居跡を調査し終えて、縄文時代へ調査が移行すると少し様子が変わってきました。特に、多数の細かな黒曜石のチップ（さいへん 砕片）やフレーク（はくへん 剥片）、さらには壊れた石鏃や燃糸文系や押型文系、沈線文系の土器片が出土し



写真2 縄文早期前半の遺物集中部

1/1964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

35 多摩ニュータウン No.327・330 遺跡

るように同時期の燃糸文系や押型文系、沈線文系の土器片がすぐ近くから見つかったのです。おそらくニュータウンでは、この時期の石鏃と土器片が隣り合わせで出土した事例はこれが初めてだったのではないのでしょうか。

さらに、まだおまげが付いていました。黒曜石の細

かな欠片や、形や大きさの異なる複数の敲石がたくさん見つかることで、当時、この場所が石鏃の製作現場だったと判明したのです（写真2・3）。



写真3 縄文早期前半の石鏃と土器

こんな発見は狙ってできるものではありません。「偶然」なのです。後世の住居跡は調査範囲の

ほぼ全面に広がって、一部では重なり合う所もある。しかも住居跡はかなり深く掘られていて、遺っている確率はほんのわずかだったのです。複数の住居跡に囲まれた約11×8mほどの狭い場所（写真1矢印）。ここから見つかるのです。もしそこに一軒でも住居が建てられていたら、この発見はありませんでした。あまりにも「偶然」が重なって怖いくらいです。

歴史上の重要な事柄が「偶然」から発見されるということは間々ありますが、様々なヒントを見逃さ



図1 多摩ニュータウンNo.327・330遺跡位置図

ない研究者の姿勢が「偶然」を呼び込むと思っています。発掘調査の現場に於いてはあちらこちらに目配り、気配りでアンテナを広げ、できうる限りの情報を拾い上げることが大切なことだと再認識した24年前の出来事でした。（並木 仁）

※今号の表紙：現在調査中の世田谷区下野毛遺跡 公園整備された野毛大塚古墳と新たに発見された野毛13号墳周溝



たまのよこやま 111

2018年1月25日発行

東京都埋蔵文化財センター

〒206-0033 多摩市落合 1-14-2

TEL 042-373-5296 <http://www.tef.or.jp/maibun/>